MOVIN'

高岡デザイン情報誌「ムーヴィン」

特集1
新しい市場開拓に挑む技術集団
ハイヒルプロジェクト

特集2
ドイツのグッドデザイン賞
iFデザイン賞&レッドドットデザイン賞

未来へ残す町のデザイン
高岡伏木

2005 vol. 14

ISSN 0918−7111

MOVIN' バックナンバープレゼント

ご希望のナンバーがございましたら下記までお申し込みください。各号、先着100名様に無料で差しあげます。なお、送料はご負担いただきます。

■官製ハガキにてお申し込みください… 裏面に、ご住所・氏名・職業・勤務先名を明記のうえ①希望のナンバー（複数号可能）②興味のあった記事 ③本誌に対するご意見をお書きください。先着100名様に無料進呈いたします。なお、送料は本人負担（宅配便にて着払い）となります。また、各号お一人一冊とさせていただきます（1号・2号は在庫がありませんのでご了承ください）。 ※締切／平成17年8月31日消印有効

vol.1
特集／松永 真「高岡イメージポスターを制作して」WAY／伝統工芸とコンピュータ 街・デザイン探訪／金屋町

vol.2
特集／黒川雅之「モノづくりの世界」WAY／NEWS・クレアグループ 街・デザイン探訪／山町の土蔵造り

vol.3
特集／黒木靖夫「これからのモノづくりとデザイン」WAY／アルミ加工産業・和菓子業界 街・デザイン探訪／港町「伏木」

vol.4
特集／平野拓夫「これからのデザイン環境」WAY／高岡の梵鐘 街・デザイン探訪／八丁道

vol.5
特集／池田満寿夫「アートと日本」WAY／タカタレムノス 街・デザイン探訪／吉久

vol.6
特集／高岡のデザイナーとそのワークス モノづくりの情景／彫金師 私のグッドなプロダクト／荻野克彦 私と高岡クラフトコンペ／羽生野亜

vol.7
特集／高岡とクラフト モノづくりの情景／塗師 私のグッドなプロダクト／森山明子 私と高岡クラフトコンペ／金子 透

vol.8
特集／デザイン教育と地域産業 モノづくりの情景／原型師 私のグッドなプロダクト／杉本貴志 私と高岡クラフトコンペ／下尾和彦

vol.9
特集／高岡市デザイン・工芸センター モノづくりの情景／鋳金家 私のグッドなプロダクト／川上元美 私と高岡クラフトコンペ／町田俊一

vol.10
特集／北陸4県の「素材と技術展」モノづくりの情景／指物木地師 私のグッドなプロダクト／松永 真 私と高岡クラフトコンペ／太田真人

vol.11
特集／高岡発ユニバーサルデザイン
YOUNG MEISTER／木型師 審査員が買ったクラフト／吾原太郎 未来へ残す町のデザイン／高岡山町筋

vol.12
特集／サステナブルデザインフェスタ
YOUNG MEISTER／銀細工 審査員が買ったクラフト／山田節子 未来へ残す町のデザイン／高岡金屋町

vol.13
特集／北欧のデザイン・北陸のデザインフェスタ
YOUNG MEISTER／着色師 審査員が買ったクラフト／内田繁 未来へ残す町のデザイン／高岡吉久

高岡デザイン情報誌「ムーヴィン」
VOL.14 2005年3月31日発行
発行
高岡市デザイン・工芸センター
〒939-1119 高岡市オフィスパーク5番地
Tel 0766-62-0520 Fax 0766-62-0521
http://www.suncenter.co.jp/takaoka/
E-mail tdcc@suncenter.co.jp
企画・編集・印刷
相互企画印刷株式会社

R100 本誌は古紙100%の再生紙を使用しています。

made in takaoka
高岡で生まれた逸品 ❶

写真の家具のような箱、実物の大きさは高さが約26センチ。本誌の寸法（天地）がおよそ30センチだからそのコンパクトさは容易に想像できよう。表面は漆の呂色仕上げ、内陣にある光背をイメージした凹んだ半球状のしつらえは、一枚一枚組み合わせられた木に金箔が施されている。これら木型、塗り、着色、鋳物、加飾のほとんどは高岡銅器や漆器に携わる職人の手技によるものだ。

この箱は「かたり箱」と名付けられた新しい祈りの空間で平成17年1月に発売された。形式化されたいわゆる宗教的な仏壇という考え方ではなく、思い出の人と心の交流を通して語り合う箱として生まれた。和洋を問わず室内や家具とコーディネートできる上質なデザインで、モダンな花器・香炉・燭台（写真左）もあわせてシリーズ化された。製作したのは地元で銅器、漆器に携わる問屋やメーカー3社で発足した高岡工作連盟「灯華香」。デザインにはプロダクトデザイナー佐藤康三氏を起用した。佐藤氏は平成14年の秋に高岡で「コーゾーファクトリー」を構え伝統工芸技術を生かした活動を進めている。

メンバーの笠原昇雲堂の笠原社長は

現代の住空間に新しい思想で語りかける祈りの空間「かたり箱」。

「高岡の伝統工芸品の多くは問屋主導で開発し、それをメーカーや職人が作るというシステムが功を奏していた時代もありましたが、もはや限界だと思います。職人も品質だけでなく使い手の顔を見たものづくりが必要です。高岡には世界に誇れる優れた職人も多く、その技術に裏打ちされた質の高い商品開発をすることで高岡の可能性はもっと広がると思います。そのためには組織が必要と思い、リスクもそれぞれ分担する工作連盟を立ち上げたんです」と設立の動機を語る。灯華香は「かたり箱」のブランド名で「今後は例えばテーブルウエアを開発するグループなどが後に続けば」と笠原氏は高岡工作連盟の発展的な進化に期待する。

高岡伝統工芸の新しい思想と開発システムで誕生した「かたり箱」。現代のライフシーンになにを語りかけるのか、市場での評価はこれからだ。

高岡工作連盟「灯華香」
〈㈲二上製作所、㈱能作、㈱笠原昇雲堂〉
高岡工作連盟の名称は、20世紀初頭のドイツで「芸術と産業と職人技術の協力」を通して工芸の品位を高めること目的に結成した「ドイツ工作連盟」の考え方をヒントに命名された。
問／事務局／㈱笠原昇雲堂　笠原
tel 0766・21・1858

かたり箱 BC-B（黒紫）type
W208×H325（脚部を含む）×D154
※ここに紹介したかたり箱と内陣の形態および色彩はシリーズの一部です。

かたり箱 AF-R（朱）type　W210×H258×D157　※イメージ写真のため表面色は実際の色（朱色）と異なります。

MOVIN'
高岡デザイン情報誌「ムーヴィン」――2005 vol.14
CONTENTS

MADE IN TAKAOKA ❶
かたり箱――1

特集❶
新しい市場開拓に挑む技術集団
エヒヒ（ハイヒル）プロジェクト――3

特集❷
ドイツのグッドデザイン賞
i-Fデザイン賞＆レッドドットデザイン賞――5

KEY PERSONS
大学（学長）をクライアントに家具を受注
生活者の視点からのもの作りで教育向上
国立大学法人高岡短期大学――9

工芸体験実習リポート
鋳物でアルミの時計をつくる――15

YOUNG MEISTER
TSM（高田製作所スタンディングメンバー）――17

CHOICE2004
審査員が買ったクラフト――21
ムーヴィン通販倶楽部――22

未来へ残す町のデザイン
高岡伏木
古刹「勝興寺」の輝きが甦り新しい賑わいづくりが始まる。――23

DESIGN NEWS FILE――11
MADE IN TAKAOKA❷――14
平成17年度工芸体験実習開催予定――16
技を伝える――18
高岡発「素材と技術」レポート――19
MADE IN TAKAOKA❸――26
バックナンバープレゼントのお知らせ――27

表紙／高岡市伏木北前船資料館の望楼

〈写真提供・取材協力〉
青井一彩
青木有理子
伊藤隆道
稲葉満
内島昭夫
江守武治
大熊幸雄
笠原他喜雄
CULTA
株式会社グラスキューブ
幸像サコヨ
国立大学法人高岡短期大学
小松研治
斉藤慎一
三協アルミニウム工業株式会社
株式会社三佳
島田映
末広開発株式会社
高岡工作連盟（灯華香）
高岡市商工労働部観光物産課
高岡市都市整備部建築指導課
高岡商工会議所
高岡銅器協同組合
高森淳一郎
株式会社竹中製作所
棚橋秀人
TSM
手わざ
東海達也
株式会社能作
比奈の会
平沢豊
伏木商工業青年部会
伏木地区開発推進協議会
伏木文化会
ふしぎ屋
益田文和
やや家
〈50音順・敬称略〉

［特集❶］

地場活性化と技術を売る仕組みづくりで、グッドデザイン賞特別賞受賞。

新しい市場開拓に挑む技術集団「HiHill（ハイヒル）プロジェクト」

高岡市デザイン・工芸センターと地場の問屋、職人、デザイナーが共同で進めるハイヒルプロジェクトが、最近一つの大きな成果を挙げた。「地場活性化の新しい仕組みづくり」が日本産業デザイン振興会主催のグッドデザイン賞特別賞（日本商工会議所会頭賞）を受賞したのだ。高岡銅器や漆器、ガラスの技術を商品開発に生かすビジネスモデルを構築した点が評価された。

ハイヒルプロジェクトは、高岡市デザイン・工芸センターが取り組む「新クラフト産業デザイン育成支援事業」の一環として、1999年からスタートしたもの。地場産業の活性化を目指し、当センターと地場の問屋や職人、デザイナーが共同で高岡の新ブランド「HiHill」を立ち上げ、'03年10月に有限会社ハイヒルとして法人化。「技術を売る」というコンセプトのもと、全国の建築やインテリアなどの業界をターゲットに金属、漆、ガラスを生かした素材の売り込みを展開している。

中でもユニークな試みは、職人の優れた技術をアピールするマテリアルプレート（表面処理見本）の商品化だ。開発の際には、東京のデザイナーやプロデューサーを招いた研究会を定期的に実施。メンバー全員が対等な立場で評価し合うことで、多くの新技法や表現方法がデザインされた。プレートは全部で190種（金属40種、漆140種、ガラス10種）。和紙や金箔を張り込んだ漆、マルモの結晶を出した真鍮（しんちゅう）、米ぬかを塗って焼き模様を出した青銅など、建築やインテリアに限らず、プロダクトデザインなどにも幅広く活用できそうなものがたくさん揃っている。プレートの裏には技法や価格、納期などが記載されており、ユーザーが商品化のコストを計算するのにも便利だ。

これまでに、東京目黒のホテル「クラスカ」に採用されフロントのカウンターボードや照明器具を制作。この他にもクリナップのキッチンボードやマンションのエントランスホールなどにも用いられるなど、ハイヒルの素材と技術そして新しい売り方が、地場に新たなビジネスチャンスをもたらし始めている。世界的に権威のある「グッドデザイン賞」の特別賞に選ばれたのも、こうした活動が認められた結果であろう。

ハイヒルでは、今後も積極的に技術を売り込み、高岡の伝統素材を建築やインテリア、プロダクトデザインなど、幅広くデザインの現場に生かしていきたいと考えている。

'04 「グッドデザイン賞特別賞」受賞
ハイヒルプロジェクトの地場活性化の新しい仕組みづくりを2004年度グッドデザイン賞の新領域デザイン部門に申請。この活動が高く評価され、特別賞の日本商工会議所会頭賞を受賞した。また、「Japan Home & Building Show 2004」や「東京国際家具見本市 2004」へ出展し、さらなる市場開拓を展開した。

'03 「有限会社ハイヒル」設立
ブランドの知名度アップと市場開拓を求めて、素材系見本市「IPEC21 2003」や「東京国際家具見本市 2003」へ出展。ハイヒル研究会の21事業者（個人・企業）で、金属、漆、ガラスなどの素材による建築内外装材やインテリア小物などの商品開発、デザインの受託及び製作販売事業を営む「有限会社ハイヒル」を設立し、商品化の推進と受注体制の整備を図った。

'02 HiHillブランド、東京展で発表
高岡銅器や漆器の有志企業10社によるハイヒル研究会を結成し、商品開発の成果品と表面処理素材を高岡ブランド「HiHill」として東京のリビングセンターOZONEで発表。これまで伝統産業に縁遠かった建築や自動車、家電などのプロユーザー（建築家やデザイナー）の関心が高く、具体的な受注や技術提携の依頼を受けた。

'01 金属、漆、ガラスの商品開発
新商品開発会議のメンバーに高岡漆器の企業有志が新たに加わり、金属、漆、ガラスの伝統的な表面処理技法のサンプル化や新技法の研究を実施。これらの素材を用いて猪口やトレー、照明、小箱などのインテリア小物の開発も積極的に行った。

'00 ブランド名「HiHill」決定
高岡銅器の企業有志による新商品開発会議を設け、東京からプロダクトデザイナーやデザインプロデューサーを招いて、鉛レス素材を用いた金属製食器の開発を実施。高岡の産地イメージを高めるブランドマーク「HiHill＝高岡」に決定。

'99 ハイヒルプロジェクトの前身
高岡銅器の企業有志による鉛レス素材開発研究会を発足。環境に配慮した鉛レス銅合金の開発をスタートした。

ハイヒルプロジェクトの仕組み
高岡市デザイン・工芸センター（支援・デザインコントロール）
職人集団（製造）
HiHill（プロモーション・販売）

Good Design
グッドデザイン賞とは、1957年に当時の通商産業省が設立した「グッドデザイン商品選定制度」を継承し、1998年に(財)日本産業デザイン振興会がスタートさせた総合的なデザイン評価・推奨制度。デザインが優れたものことを選定し、受賞した商品にはGマークの使用が認められる。

「ハイヒル」ホームページアドレス／ http://hihill.jp

ドイツのグッドデザイン賞
―iFデザイン賞＆レッドドットデザイン賞―

ドイツのデザインといえば、機能的でシンプルなフォルムが特徴的。自動車で例えるなら、メルセデスにフォルクスワーゲン、カメラでいえばライカ、家電はブラウン…。現代デザインの源流「バウハウス※」の理念が息づいている国だけに、その質の高さは世界が認めるところだ。高岡市デザイン・工芸センターでは、こうしたドイツデザインの新しい潮流やビジネス戦略を学び、これからのものづくりに生かそうと、「ドイツのグッドデザイン賞」（平成16年10月1日から14日）を開催した。展示会場では、ドイツを拠点とした国際的なデザイン賞「iF」と「レッドドット」に選ばれた世界各国のグッドデザイン商品の中から約150点を紹介。また、会期中の10月9日には、両デザイン賞に縁のあるお二人を講師に招き、セミナーを2部構成で実施した。

Part 1

ソニーのデザインイニシアティブ

2000年レッドドット デザインチーム・オブ・ザ・イヤー受賞の経緯

●稲葉 満

Part1の講師は、ソニーが2000年レッドドットのデザインチーム・オブ・ザ・イヤーを受賞した際、陣頭指揮にあたっていた稲葉満氏である。

人と人とのコミュニケーションが、良い商品を生み出す

ソニーのデザインの現場では、少人数のチームの中で、濃密なデザインの議論（コミュニケーション）が行われます。そこでは新人もベテランも関係ありません。個人ではなく、デザインを徹底的に叩くのです。デザイナーの主要な会議には、経営のトップが必ず出席します。会議室の壁の前に商品が並べられ、デザイナーは自分の商品についてマーケットや価格、機能など、デザインに至るまでの経緯をすべて説明しなければなりません。役員は突っ込んだ質問をし、それにデザイナーがシドロモドロするわけですが、こうして人とのコミュニケーションの場を多く経験することで、良い商品をつくっていく。これが、我々の仕事の仕方なのです。

また、ソニーではデザイナーが実際にマーケットとなる町で暮らし、人々の生活を観察し、自らの体験から発想を続けています。ここで代表例を一つご紹介しましょう。場所は、アメリカのサンフランシスコ。年1回、若者たちがローラーブレードやスケートボードのチャンピオンを競う、「Xゲーム」という大きなイベントが開催されています。そこへデザイナー4人が押しかけて、若者たちの行動を何日も観察し続けました。その結果を分析し、そこに集まる若者たちが欲しがるような商品を考えるのです。ここから、「SPORTS2」というウォークマンの新作が誕生しました。デザインチームの中にはグラフィックデザイナーもいて、宣伝広告やパッケージの方向性などを示す役割を担います。商品化の際にはスキー場にスポーツ雑誌の記者を招き、キャンペーンも主催しました。その甲斐あって、SPORTS2はアメリカでシリーズ化されるほどの人気商品となりました。

商品には思想が必要

ソニーのデザインは、先の経営者である大賀典雄が1961年、ドイツ留学の土産としてカメラを持ち帰ったことから始まりました。当時はまだ日本が貧しく、デザイナーも目標を見失っていた時代です。そこに彼がライカやハッセルブラッドのカメラを持ち込んで、ドイツの工業水準の高さや製品の精緻さを披露した。そこから「Black & Silver」というソニーのデザインスタイルが生まれ、数々の商品を世に送りだしてきました。

現在は、デザイナーがクオリティーコミッティーを構成し、商品の良し悪しを採点しています。レッドドットなどのデザイン賞には、高得点の商品しか出品しない決まりも設けています。こうした厳しいコミッティーの存在もあり、年々、デザイン賞での受賞商品

※バウハウス…1919年、芸術と技術の再統一を図るという教育理念でドイツのワイマールに開校された造形芸術学校。現代デザインの源流といわれている。

iFデザイン賞／1953年に設立。重要な経済資源としてのデザイン評価を確立し、今や世界的デザインクオリティーの代名詞となっている。

design award

レッドドットデザイン賞／1954年に設立。革新性、機能性、エコロジーなど厳しい選考基準を設け、プロダクトデザイン界の最高権威といわれる。

reddot design award

稲葉 満
Inaba Mitsuru

ソニー株式会社顧問・元クリエイティブセンター長
多摩美術大学客員教授

'68年ソニー株式会社デザイン室入社。'73年ソニー・コーポレーション・オブ・アメリカ デザインセンター Vice President。'87年ソニー株式会社商品本部デザインセンター第1部部長。'91年同社経営技術情報システム本部副本部長。'94年ソニー・コーポレーション・オブ・アメリカ情報システム部門Senior Vice President。'97年ソニー株式会社クリエイティブセンター センター長。'01年同社執行役員。'03年同社顧問。

●センター長時代は商品開発のためのデザインに留まらず、ソニーの企業活動全般に関わる社内外向けのデザイン発信を指揮。現在は、新社屋建設プロジェクト室室長として新しいワークスタイルを推進中。

も増え、2000年にはついにレッドドットでチーム・オブ・ザ・イヤーに輝きました。授賞式やウィナーズパーティーはとても盛大で、世界各国のデザイナーと出会い語らうことができました。記念展示の後には、記者会見もセッティングされています。こういう盛り上げ方の上手さは、ドイツのお国柄なのでしょう。メディアがどっと押し寄せて、受賞のニュースがテレビや新聞、雑誌などに大々的に取り上げられました。

このようにソニーのデザインチームが華やかな成功を手にできたのはなぜか？ 私なりに分析すると、「Black & Silver」というデザインスタイルを軸として、いろんなデザインのテーマに挑戦してきたからだと思います。これからデザイナーを目指す方も、現在デザイナーとして頑張っている方も、自分が発信したい思想を明確にし、デザイン上で表現できるようになると素晴らしいと思います。

Part2

ドイツデザインの合理性と人間性

●益田 文和

Part2の講師は、㈱オープンハウス代表取締役の益田文和氏。今回の展示商品の特徴を紹介しながら、ドイツデザインについて解説した。

ドイツのデザインはヒューマンスケール

ドイツ人は「ドイツと日本のデザインは似ている」とよく言いますが、僕は大きな間違いだと思います。確かに、シンプルという点では共通していますが、日本人はシンプルでありたいと思ってデザインをしているわけではありません。ただ練りすぎて複雑になってしまったデザインを整理した結果、シンプルになっていくだけ。一方、ドイツ人は曖昧なことができない性格なので、デザインにはすべて理屈があり、筋が通っています。だから、自分の頭の中の演算容量を超えたデザインはできないのです。それを私は「人間性＝ヒューマンスケール」という言葉を使って表現しています。例えば、初期のマッキントッシュのデザインなどは、その典型でしょう。子供でも覚えちゃう単純なプロポーションですから。もう一つ、ドイツ人らしいデザインにテレビのリモコンの例があります。テレビとリモコンも同じ形をしていて、床に寝転がってリモコンを回すと、テレビが同じ動きをする。非常にシンプルな思考でわかりやすいですよね。

シンプル美を支えるマイスターの手技

iF受賞のドイツ商品を見ていると、ドイツデザインにとって、モジュールが非常に重要な要因であることに気づかされます。例えば、スチール家具のメーカーがパイププレートを使って家具を作るとしましょう。日本人なら、壁面家具を作りますが、ドイツ人はそれだけでは留まらない。部屋全体を構成する構造体を作り、やがては都市へ飛びだし、最終的には宇宙ステーションの巨大な構造体をも構成する…。そんなモジュールアート的な思考を持っているのです。機会があれば、飛行機でフランクフルト空港へ降り立つ時に、ドイツのビル街を見てみてください。どのビルも基本的なモジュールがまったく同じで、エンドレスの恐怖を感じてしまうかもしれません。

また、どう見てもドイツのデザインだとわかる、シンプルで合理性に富んだ商品もたくさんあります。例えば、異形の楕円の断面パイプで構成されたイスとテーブル①。これなどは、「楕円パイプだ！」とひらめいただけで、完成してしまうデザインです。それ以外の要素は排除するので、図面を引くのも楽そう。でも実は、シンプルがシンプルであり得るということは難しく、ディテールや仕上げの素晴らしさの証でもあります。誰にも口を挟ませない、シンプルな思考が生きた家具②などを見ていると、マイスターの息遣いが聞こえてくるようです。

空気でデザインのイノベーション

では最後に、僕が今「これぞドイツのデザインだ！」と思っているものを紹介します。一つは、空気弁メーカーFESTO社と同社のデザイナーであるアクセル・タルマーによって共同開発された空気で膨らます建築「Airtecture」③です。空気が入っているのは壁面と柱一本一本。常に気象状況に合わせて、200の独立したコンピュータが各々の空気圧を演算しながら空気を送り込んでいます。ディテールがとても美しく、世界中のデザイン賞を総なめにしました。そして、もう一つが同じ空気シリーズの「スティングレイ」です。これは飛行機と飛行船の機能を併せ持った近未来の乗物。滑走路が不要で、空気圧の強弱でフワッと離着陸する、まさにデザインのイノベーション。デザインによって広がる世界を見ていると、非常に勇気づけられます。

[特集❷]

ドイツのグッドデザイン賞

—iFデザイン賞＆レッドドットデザイン賞—

益田 文和
Masuda Fumikazu

東京造形大学教授
株式会社オープンハウス代表取締役

'73年～国土建設、デザインオフィスバックス、フロッグデザイン（ドイツ）などを経て、'91年株式会社オープンハウス設立。'92年～新潟県県央地域、山梨県、高知県などで地場産業の振興に関わる。'97年アルミ合金製作業工具シリーズALUTOOLでグッドデザイン金賞受賞。'98年エコデザイン研究所を設立。'00年東京造形大学デザイン学科教授就任。
●商品の企画開発に関わるデザイン及びデザインコンサルテーション、デザインの振興事業に関するコンサルテーション、エコデザイン及びユニバーサルデザインを中心としたデザインの調査研究が専門領域。

Key Persons ④

教育現場からのデザインムーブメント

［国立大学法人高岡短期大学］

大学(学長)をクライアントに家具を受注 生活者の視点からのもの作りで教育向上

―文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」に採択―

美術工芸系の教育機関として独自のカラーを打ち出してきた高岡短期大学。今秋、富山県内3国立大学の統合を目前に控え、文部科学省の特色GPに採用されたプロジェクトは、十数年前から模索・継続されてきたものだが、その取り組みを16年度の授業例を交えながら紹介しよう。

学内に模擬社会をつくっての受注制作授業

「学長。どうですか、このテーブル。私たちが企画・デザインしたものですが、この談話室の窓際に置いたら、学生にも先生方にも便利だと思いますよ」

平成16年10月、高岡短期大学専攻科(産業造形専攻)1年生の工藤桂子さん(金属工芸)は、仲間の学生とともに企画・デザインしたテーブルのよさを、西頭徳三学長に熱心に説く。その様子には、実社会の企画営業を思わせる一面がある、といってもいい。

同短大では、授業の一環として大学(学長)が発注者、学生が受注者の模擬社会をつくり、予算の範囲内で学内に設置して使うテーブル、椅子、ベンチ、ゴミ箱などの備品・家具を制作。この授業を希望する学生、すなわち受注制作を希望する学生(グループ)が複数いる場合は企画コンペティションを実施し、発注者(大学)側は制作物のコンセプトやデザイン、使いやすさ、費用などを総合的に検討し、どの案を採用するかを決める。

▲企画段階で様子を見に来られた学長にプレゼンテーション。

▲2人掛けのテーブルの間に荷物を置くためのスペースがあるためテーブルの上は広く使え、また中庭も見渡せる。

▲当初に企画されたテーブルの模型。
両サイドの食い込みは談話室の柱に合せていた。
「2人でも利用できるテーブルが欲しい」
「荷物を置けるスペースがあれば…」などの
談話室利用者の声を拾い上げ、企画が練り直された。

従って、受注を希望する学生側も必死だ。選択の授業とはいえ、実社会での受注・商品化のプロセスを模擬的に体験する。企画を採用してもらうためには、プレゼンテーション用に企画書を作成し、デザインの立案やおおまかな設計図、そして人件費は計上しないものの、予算の計画書も作成しなければいけない。また、プレゼンテーションは、学長をはじめ関連する授業の教官を前にして行われるため、その練習を教室の片隅で何度も繰り返す学生もいるという。

この取り組みは「学内を学生作品で埋めつくそうプロジェクト」と名づけられ、小松研治教授(木材造形)を中心に平成4年度から実施されてきたもの。16年度の課題は談話室のテーブルと決まり、後期の10月からの授業でスタートしたのであったが、3カ月前の7月にはこのプロジェクトが文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」(特色GP)に採択され、実践的な工芸教育が国の後押しを受けて弾みがつく形になったのであった。

教科を超えて教官が協力

そもそもこのプロジェクトは、小松教授がスウェーデンに留学した時(平成2年)の経験に端を発している。

「北欧の美術工芸系の大学は、美術と工芸を分けていました。個人の感性の表現としてのもの作りも大切ですが、生活を便利にするためのもの作り、生活用品をより使いやすくするためのもの作りも重要なものと位置づけていたのです。私自身の反省も含めていうと、日本ではそれが混同していて、学生への指導も中途半端なような気がしました」(小松教授)

帰国して早速、平成4年度には大学の食堂厨房の椅子の制作を実施。この椅子は調理員さんたちが作業の合間にひと休みするためのスツールで、制作に当たっては使い手の意見を聞き、また制作が終わった後でも講評を受けるなど、使い手を意識しながら制作することが指導された。

以来、本年度までの取り組みは、表に示したとおりである。学内での協力体制も徐々に整い、16年度の談話室のテーブル制作に当たっては、小松教授の他に人間工学や家具デザイン、建築設計、木質材科学、金属工芸などが専門の8名の教官が指導に参加。教科を超えた教官のコラボレーションや、専攻分野を超えた学生の共同作業もできるようになり、まさしく特色のある授業が展開されるようになってきた。

「学内を学生作品で埋めつくそうプロジェクト」の制作課題

実施年度(平成)	主な授業科目名	制作作品
4	指物法	食堂厨房の椅子
5～7	指物法	学生が使う作業用スツール
8～10	指物法 卒業研究	複数製作・共同作業課題
11、12	複合造形	本学トイレピクトグラム(24箇所)
12、13	造形工芸実習	エントランスホールの椅子、ソファー、テーブル(5セット)
13、14	家具制作	本学ゲストハウスでの下駄箱、スツールなど(36種)
14	造形工芸実習	本学中庭のためのベンチ(9台)
15	造形工芸実習 家具制作	学生談話室の椅子(24脚) 学内のごみ箱(18種類)
16	家具制作	救急箱、消火器スタンド等
16	造形工芸実習	学生談話室の長テーブル

▲製造は全員共同で。
コンセプトワーク、デザイン・設計、
仕入れ・会計などは分担で。

▲「特色GP」に採択されたプロジェクトを中心になって進める小松研治教授

授業の特色をまとめると、以下のようになる。

①大学環境を発想の場として、実社会と同じスケールの課題を設定
②学生による、原価計算に基づいた企画書・工程計画書・報告書等の作成
③大学が発注者となる模擬の受注制作授業
④量産を前提とした実社会と同じ製造方法の導入
⑤コンペティション形式による競争原理の導入
⑥第三者による授業評価方法の導入(学外専門家)
⑦学科・専門を超えた融合教育の実現
⑧引渡式を大学主催のセレモニー化(達成感と責任感の確認)
⑨引渡時、パネルによるプレゼンテーションの実施(作品特性の説明・言葉化、制作過程の総括・検討など)

生活者の視点と技術、知識を持って…

こうした特色のある授業を展開してきた中で、学生の意識も徐々に変化してきた。製造作業そのものは共同で行っているが、コンセプトワーク、デザイン・設計、仕入れ・会計などは学生が分担して行い、一つひとつの業務の大切さを理解するとともに、自分の得意・不得意を認識。また、使う人にとっての使い勝手を意識して制作するため、「より良いものを作ろう」と意識の高揚も見られる。その結果、作ることに生きがいや達成感を感じるようになり、進学意識の高まりや就職率の向上となって現れているという。

授業に参加しない一般の学生にとっても、いい刺激になっている。彼らは、使い心地を実体験することによって作り手の配慮を読み取り、それを共有する力がついてきている。時には不足な点や改善すべき点も見い出すであろう。制作に携わった学生も、作業が終わった後では、一利用者としてそれを感じるのだが、気づくことが改善への要求の高まりとなって現れ、その情報が発信されるようにもなってきた。

このプロジェクトは、作り手・使い手双方の意識・意欲の高揚を目指して進められたものである。今では「○○が使いにくいから、今度の課題は○○にしましょう」とか、「□□に△△があったらいい」と学生側から次年度の課題を提案するようにもなってきたそうであるから、車の両輪が動き始めてきたといってよい。十数年の取り組みを振り返り、小松教授が語る。

「学生が作った家具でも、ずーっと設置しておくわけではありません。より良いものを作って置き換えることもあるでしょう。学生には、'利用者に喜んでもらいたい'という作り手の視点と、'ここを工夫したら使いやすいのに'という消費者の視点、この2つを合せて私たちは生活者の視点といっていますが、生活者の視点と専門的な知識と技術を持って社会に羽ばたいてもらいたい」

▲「スチール製のゴミ箱は美観を損ねる」という理由で、木製のボックスで覆われた。

▲引渡式終了後、早速テーブルに着く西頭学長を囲む制作者のみなさん。

◀「掃除の時に消火器が邪魔になる」ので消火器台が作られた。

平成17年10月には、富山県内3国立大学が統合し、高岡短期大学は新大学の芸術文化学部(設置予定)として新たなスタートを切ることになる。特色のある教育プログラムが、新大学でも引き継がれ、さらなる発展が期待されるところであろう。

Design News FILE

2004年度デザインの動向

「銅具」をテーマに新商品開発

生活の中の「銅具」をテーマに水まわりの小物を発表

問 高岡銅器団地協同組合　tel 0766・63・5005

高岡銅器団地協同組合では3年間にわたり建築家の芦原太郎氏のプロデュースにより新商品開発に取り組んできた。今回は芦原氏に加え山田節子氏（コーディネーター）と平沢豊氏（マガジンハウス編集者）をプロデューサーに迎え、第一線で活躍するデザイナーや建築家ら5名がデザインした金属クラフトを発表した。

生活の中で生かされる道具としての「銅具」をテーマに、粋にそしておしゃれに暮らすためのシンプルなアイテムが生まれた。銅合金をはじめ錫（すず）やアルミを素材にした湯沸かしや鉢、水差しやサニタリーアクセサリーなど、いずれも高岡の鋳造技術が生かされた美しいディテールやフォルムが印象的だ。これらの作品は「水のしつらえ展」（平成17年1月30日～2月5日）として、東京・西麻布のギャラリー「ル・ベイン」にて披露された。

なお、このコラボレーションに参加したデザイナーは、内田繁、緒方慎一郎、桂川眞、小泉誠、佐藤康三の各氏。

同組合では今後、それぞれリデザインを進めながら価格面での検討も含め製品化にこぎつけたいとしている。

錫のコクーン（しつらい鉢・プレート／デザイン桂川眞

水注／デザイン内田繁

工芸都市高岡2004クラフト展

グランプリに、日常の美を表現した鉄瓶

問 高岡商工会議所内クラフトコンペ事務局　tel 0766・23・5000

「工芸都市高岡2004クラフトコンペ」の表彰式が平成16年10月28日、大和高岡店で行われ、神奈川県の岩清水久生さんが作った「焼肌磨きの酒器たち」がグランプリに輝いた。同会場では、11月1日まで「クラフト展」が開かれ、入賞を含む入選作品858点が展示された。

グランプリ「焼肌磨きの酒器たち」

コンペは今回で18回目で、全国から2,150点の応募があった。グランプリ作品は、毎日の暮らしで使えそうなシンプルで親しみ深い鉄瓶3点。クラフト展での注目度も高く、訪れた人たちは鉄瓶を実際に手にして、重さや使い心地を確かめていた。また、来場者による人気投票で見事1位となったのは、青木有理子さん（富山市）の「匹で数える器」。愛くるしい表情が見る人の心をなごませ「生活者が選ぶクラフト賞」に選ばれた。

※「匹で数える器」は22頁に紹介。インターネットで購入可能！

クラフト展に、新風。高岡のまちがクラフトギャラリーになった

クラフト展に合わせて、高岡市内19カ所のクラフト店やギャラリーで開催された「タカオカクラフトウィーク」が、クラフトファンの心をつかんだ。ラリーカードを片手に店巡りをした人は、目標5割増の約300名。ほとんどの店が開業以来の最高集客数を記録した。

まちの駅たかおかでラリーを楽しむ参加者

このイベントは、市内3ギャラリーで構成するタカオカクラフトウィーク実行委員会による企画。クラフト展の来場者にクラフトのまち高岡の魅力を広くアピールし、業界はもとより町全体を盛り上げようと、今年初めて実施した。

陶工房Hasuで開かれた手びねり体験教室

各店ではクラフト作家の展示の他、陶芸やプリントてぬぐい、銀粘土の体験教室が行われ、楽しみながらスタンプを集めて応募すると、抽選で景品が当たる仕組みになっている。ゲーム感覚でクラフトの魅力が満喫できる気軽さが人気の秘密か。会期中、来店者のほとんどがラリー参加者というのもうなずける。しかも「自分好みの店をたくさん発掘できた」「店の人と気軽に話ができた」などと、参加者の評判は上々。中には、「新聞の折込チラシで興味を持った」「カードがおしゃれで楽しく回れた」という意見もあり、宣伝に力を入れた戦略も功を奏したようだ。実行委員会では今回の経験を糧として、来年度も活動を継続していきたい考えだ。

〈最優秀賞〉住宅部門／七尾邸

〈優秀賞〉住宅部門／佐野邸

〈優秀賞〉住宅部門／S邸

〈優秀賞〉建築物部門／中尾清月堂野村店

〈優秀賞〉建築物部門／協伸静塗

平成16年度高岡都市美景観賞

7年ぶり、住宅に最優秀賞

問 高岡市都市整備部建築指導課　tel 0766・20・1429

魅力ある景観を生み出している建造物などを表彰する「高岡都市美景観賞」が実施され、各賞が決定した。平成16年度は、住宅部門で高岡市明園町の七尾邸が「伝統的な町家を思わせるプロポーションをつくり、センス良くやわらかなゆったり感を表現している」と評価が高く、満場一致で最優秀賞に選ばれた。

審査は市民から推薦・応募のあった33件を対象に実施。今回新たに選考委員長を務めた金属造形家の大角勲氏をはじめ、建築や芸術、デザインなどの専門家7人によって選考された。今回は特に住宅部門に優れた物件が多く、最優秀賞のみならず優秀賞の2件も同部門から選出。佐野邸とS邸のどちらも、道行く人に新鮮な印象を与えるユニークなアイデアと創造性で受賞となった。このほか優秀賞には、建築物部門から「馴染ませながら景観に個性を持たせた」中尾清月堂野村店と「工場地帯にありがちな唐突な形や色もなく、美しくシンプルにまとめた」協伸静塗、町並み景観部門からは「草花が美しく映え、住人の美意識や通る人へのもてなしの心を垣間見ることができる」中田の通りが選ばれた。

〈優秀賞〉町並み景観部門／中田の通り

t[j]r発、高岡ブランド

若手制作集団t[j]rが新作80点を東京デザイナーズブロックでプレゼンテーション

問 t[j]r事務局（高岡漆器株式会社内）　tel 0766・21・0262

プロダクトデザイナー佐藤康三氏（高岡市デザインアドバイザー）をデザインディレクターとして高岡伝統産業に携わる若手メンバーで構成する制作集団t[j]r（ティージェーアール）が、平成16年10月に開催された「東京デザイナーズブロック」に出展した。このイベントは青山を中心に約150の会場で開催され、国内外から200人余りのデザイナーが参加、まさに東京中がデザイン一色に染まる。

出展作品はコンパクトな収納と使いやすさをテーマにしたスタッキングができる皿や、水まわり空間でも使用できるよう金属の脚を取り付けたアクセサリートレーやティッシュボックスなど、漆と金属が融合した「普段づかい」の生活雑貨およそ80点。これらの新作は、平成15年の秋に漆の見本帳の手板などを出展して反響を集めた国際デザインイベント「東京デザイナーズウィーク」での成果を基に、佐藤氏を交えながら商品化に取り組んだものだ。

東京デザイナーズブロック終了後は、ホテル関係の備品を扱う業社から打診もあり感触もますます。現在、商品点数を13点に絞り込んでカタログを制作し、今春からの本格的な発売に向けて体制を整えている。（商品の一部は26頁に紹介）

街なかギャラリー事業

若者たちのシャッターペイントで、中心商店街に賑わいを

問 高岡商工会議所 高岡町衆サロン　tel 0766・20・0555

高岡の中心商店街に、華やかなシャッターペイントがお目みえした。花や魚などのかわいらしい絵で、買い物客らの一服の清涼剤となっている。

実はこれ、高岡商工会議所が「街なかギャラリー事業」の一環で、今回初めて実施したもの。空き店舗が目立つ中心商店街の雰囲気を少しでも明るくしようと、閉まったままのシャッターに絵を描くことを企画。高岡工芸高校デザイン同好会と市内のアマチュア・アーティストに協力を依頼した。デザイン同好会の5人は、「高岡らしさ」をテーマに市の花であるカタカゴを明るいタッチで表現。アーティストの西田沙織さんは「夢空」と題した幻想的な世界を描き、黒色だったシャッターが見事な壁画に変身した。

企画元である同会議所の高岡町衆サロンは「ペイントで買い物客の目を引きつけ、市民も愛着を持てるような商店街になればうれしい」と話しており、今後も活動を継続していく考えだ。

第30回デザインセミナー　[平成16年11月26日開催]　主催／高岡市デザイン・工芸センター

「デザインの素」 リビングデザイナー 小泉 誠

1960年東京生まれ。'85年～原光英・原成光に師事。'90年コイズミスタジオ設立。'98年福島県観光デザインアドバイザー。'99年名古屋デザインミュージアム展示、同年～多摩美術大学環境デザイン学科非常勤講師。'00年～'03年グッドデザイン賞審査委員。'01年～富山県大山町「木と出会えるまちづくり」委員。'02年～大山家具コンペティション審査員。'03年こいずみ道具店店主、「デザインの素」出版、オリベ想創塾客員教授。'04年森沢デザイン研究所非常勤講師、高岡クラフトコンペ審査員、KOKUYO DESIGN AWARD審査員。
'94年JCDデザイン賞優秀賞（GALLERY SUZUKI）、'96年DDA賞優秀賞（C'SC95'ウシオスペックス）、'98年ナショップライティングコンテスト優秀賞（WASALABY）、'02年グットデザイン賞金賞（sumireaoi house）、'03年DDA賞優秀賞（御紙遊屋の障子展）、'04年JCDデザイン賞奨励賞（こいずみ道具店）など、受賞多数。

講師の小泉誠氏は、セミナー前半で自身の作品やお気に入りの収集品などを紹介しながら、デザインの素について説いた。最初に登場したのは、世界の古い道具たち。覗き防止のために生まれた「カギ穴隠し」、持ち運びやすさを追求して折り畳み式となった「ワインオープナー」などを見せながら、必然性から生まれる道具の魅力を語った。続いて、小泉氏が川原や海岸で拾い集めた小石を箸置きに使っているエピソードから、「形や色を考えることばかりがデザインではない。身近な道具でも、意識を変えることで新しい生活を想像させる違う道具にもなる」と提言。その例として自身の作品の中から、木製の円柱にスリットを入れてしまえる機能を考えた「箸置き」や、折り畳んで箸置きとしても使える「ショップカード」などを紹介した。この他、奈良時代の蓋付きの器"合子（ごうす）"の形から、2つの同じ座で脚を挟むことを思いついた「ハンバーガースツール」、重ねて収納する機能の追求から、平たくて柔和な魅力あるデザインが生まれた「スタッキングカップ」など、小泉デザインの素となる発想や手法を次々に披露した。

後半は、小泉氏の経験を踏まえ「商品開発をデザイナーまかせにしてはダメ。産地が開発テーマを考え、デザイナーに提案することが大切だ」と前置きした後、デザイナーと産地との関わりについて話を進めた。その好例として、ワークショップ形式で産地と共に開発を進める「徳島の椅子づくり」、産地メーカーを対象とした実践型のデザイン開発塾「岐阜のオリベ想創塾」などの新しい試みを紹介した。この他、高岡でも銅器団地協同組合や高田製作所、能作とのものづくりが進行中。「高岡の伝統技術は素晴らしく、僕自身も新たな発想が広がっているところだ」と、小泉デザインが高岡で形になることに期待を込め、講義を締めくくった。

made in takaoka
高岡で生まれた逸品 ❷

オンリーワンの技法を刻み世界にひとつだけの彫金をオーダー。

かすれ、ぼかし、にじみといった日本画のようなタッチは、金属の鏨（たがね）を打って表現された彫金とは思えないほど緻密で立体的だ。この技法は彫金師の青井一彩（いっさい）さんが生み出した彩彫（あやぼ）りと呼ばれる妙技である。青井さんの彫金技術は、美術工芸品としての花瓶や香炉などで高く評価されているが、美術工芸品に限定せずにもっと普段の生活で彫金を楽しんでもらいたいとして、工房「手わざ」で彫金のオーダーメードを始めた。

ここに紹介したメガネケースへの彫金、栞（しおり）や短冊として使えるアルミ板への彫金は、あくまでも彫金技術のサンプル。青井さんは「これらをヒントにして、長年の愛用品とか記念の品とか、とにかくお客さんから彫金したい素材を持ち込んでほしいですね。金属面ならなんにでも彫れますから」と鏨を打つ手を休める。

これまでオリジナル表札や思い出の道具を再利用したインテリアに彫金を施している。また、双眼鏡やライフルに可能か、という問い合わせもあるなど、青井さん自身も今後どんな依頼が来るか楽しみという。

チャレンジ工房「手わざ」

問 高岡市末広町1007
tel 0766・25・5355
営 10:00～19:00 休 水曜日

商店街の通りからは青井さんの伝統の技を眺めることができる。店内には高岡鋳器や漆器をはじめ、いろんなジャンルのクラフト作家の作品が展示販売されている。季節ごとの企画展示も人気がある。
※オーダーメード彫金の素材や製作費、製作期間については予め相談が必要

チャレンジ工房「手わざ」は、高岡商工会議所が主体となって中心市街地にぎわい創出を図る目的で平成16年3月にオープン。

高岡の新ランドマーク

高岡らしさを演出しながら ウイング・ウイング高岡が誕生

問 末広開発株式会社　tel 0766・22・0044

JR高岡駅前に新しいランドマークとなる再開発ビル「ウイング・ウイング高岡」が平成16年4月に誕生した。リフレインする名称からもわかるようにツインビル（民間棟と公共棟）で構成され、駅ビルに隣接する高岡市営駐車場とはペデストリアンデッキ（空中歩廊）で結ばれている。

公共棟には高岡市の中央図書館、多目的ホールやデジタル編集室などが利用できる生涯学習センターなどが、高層部には県立高校が入居。一方の民間棟はキーテナントのホテル、飲食店やサービス業の店舗、民間のオフィスが入居している。

照明の先端部分にはLEDが組み込まれている

建物の内外装には高岡市の地場産業の代表といえるアルミ素材が多用されている。とりわけ開口部分は、金屋町通りや吉久などに多く残る町家の千本格子を意識して縦にレイアウトされている。さらに1階エントランスホールの天井部分のオブジェのようなアルミ素材の照明は、「高岡七夕まつり」をイメージしたデザインとするなど、そこここで高岡らしさをさり気なくアピールしている。

左に見えるのがペデストリアンデッキ

また、地元の歴史と文化を紹介する1階の「高岡百科広場」には高岡が誇る伝統工芸士の作品の常設展示や企画展も開催され、高岡の新たな魅力あるゾーンとして多くの市民が足を運んでいる。

1階の高岡百科広場

2004日仏景観会議・高岡

日仏の専門家と市民が一緒になって、景観づくりを考察

問 実行委員会事務局（高岡短期大学事業課内）　tel 0766・25・9141

日仏の建築家やまちづくりの専門家が集まり、都市や地域の景観について考える「2004日仏景観会議・高岡」が平成16年10月1日から2日間、高岡市のウイング・ウイング高岡をメイン会場に市内一帯で開催された。

初日は、フランスの都市計画で実績のある建築家、ジャン・ピエール・シャルボノ氏や公共交通を活用したまちづくりに詳しい建築家の望月真一氏（東京）らを招いて講演会や討論会を行い、自然や文化と調和する景観づくりに向けて意見や情報を交換した。

2日目は、約150名の参加者が吉久、金屋町、山町筋、古城公園、瑞龍寺の市内5コースに分かれて歴史的な町並みを見て歩いた。金屋町コースの参加者は、高岡駅前からコミュニティバス「こみち」に乗って現地入り。石畳の町並みを歩きながら、普段は見ることのできない町家の内部や鋳物工房の作業場などを見学して回った。この日は他にも橘慶一郎高岡市長と市民による討論会が行われ、身近な町の暮らしやすさや活性化を考える良い機会となった。

都市計画のあり方について語るJ.P.シャルボノ氏

町探索で金屋町を歩く参加者

※日仏景観会議は平成11年に埼玉県吉田町でスタート。以来、毎年1回各地で開催されている。

クラフトマンズ ギャザリング2004

若手クラフトマンの集い。2回目を迎え、さらに内容充実

問 高岡市デザイン・工芸センター　tel 0766・62・0520

富山県産業高度化センターで平成16年7月17日から3日間、県内の若手クラフトマン19人と4グループが集う「クラフトマンズ ギャザリング2004」が開催された。陶器や漆、ガラスの生活雑貨、金属や木の素材感を生かした家具などの多彩な作品約1,000点が展示・販売された会場は、さながらクラフト市場。来場者は、作り手と気さくに語らいながら個性あふれる作品を楽しんでいた。

このイベントは高岡市デザイン・工芸センター、富山県総合デザインセンター、富山県産業高度化センターが共同で企画し、作り手と使い手が楽しめる交流の場として昨年度にスタート。2回目となる今回は県内作家に加え、今、東京自由ケ丘で話題の景色盆栽ショップ「品品—shinajina—」より、代表の小林健二氏をゲストに迎え、作品の展示・販売とワークショップを実施した。小林氏は、「いつもコラボレーションを楽しみながら仕事をしているので、富山のクラフトマンとの出会いも期待が大きい。積極的に交流を深め、新しい仕事のヒントをつかみたい」と話していた。

この他、とんぼ玉や七宝焼きのワークショップを実施し、会期中は1,000人を超えるクラフトファンが訪れて大盛況の内に幕を閉じた。

景色盆栽づくりを指導する小林氏（写真右）

高岡市デザイン・工芸センター
工芸体験実習リポート
4
鋳物でアルミの時計をつくる
市民体験実習【1回コース】

アルミ鋳物で自分だけのオリジナル時計をつくろう

プロの指導で初めての手づくり体験

高岡市デザイン・工芸センターでは、市民がものづくりに親しむ機会として、金工・漆工などの工芸体験実習を実施。暮らしの中で使えるものを中心に、初めてでも楽しくできる制作課題を多彩に企画している。
その中で今回は平成16年9月に行われた「鋳物でアルミの時計をつくる」の実習の様子をリポートする。

今回の講師

槻間　秀人
Tsukima Hideto
「金工作家」

1953年北海道生まれ。'78年金沢美術工芸大学卒業、日本現代工芸美術展初入選。'83年日展初入選。以降、受賞及び展覧会出品多数。'95年工房シンク設立。'96年富山市オーバードホールシンボルアート制作。'99年日本現代工芸美術展審査員。現在、金沢美術工芸大学非常勤講師、現代工芸美術家協会本会員、高岡市伝統工芸産業技術者養成スクール講師、かたかご幼稚園造形教室講師。

実習は、講師の槻間先生による「高岡鋳器のあらまし」や「アルミ鋳物」についての説明から始まった。

「高岡の美術鋳器は、全国シェア80%以上を誇ります。市内の鋳器屋さんを覗くと、銅像や花瓶、干支の置物などが並んでおり、全国でも世界でも、これほど美術鋳物の業者が集まっている地域は珍しいと思います。そうしたバックボーンの中で、銅製品、真鍮、それに続いて鉄器やアルミ製品などが起こりました。中でも建材関係のアルミニウムメーカーは、高岡から大きな企業が何社も誕生しています。このように高岡は金属に縁の深い町ですので、この実習は郷土の伝統産業にふれあう絶好の機会だと思います。

また、今回使うアルミニウムは、缶ビールやサッシなどの材料としても皆さんよくご存じでしょう。別の講座では空き缶を持ち寄って炉で溶かし、リサイクル製品をつくったりもしています。そんな身近な素材を使って、自分の好みに合った心地いい形をぜひ探してみてください」

一、原型づくり

先生にアイデアスケッチを見せながら、原型の素材や方法を相談。

表面に凹凸を付けたかったので、発泡スチロールで原型をつくることに。形が決まったら、原寸大のデザイン画を描く。

デザイン画を発泡スチロールに転写した後、カッターで切り取る。凹凸は、金属ブラシで削り出す感じ。

原型の完成

他にもこんな方法があった！

デザイン画をかたどったベニヤ板の上にシートワックス（蝋の板）を貼り、インダストリアルクレイ（粘土）で肉付けしていく。この方法なら、表面を滑らかにキレイに整えたり、文字や模様などの細工も簡単にできるのだとか。

二、鋳型づくり（型込め）

生型鋳造法（型の原料は砂と水のみ。型は焼かないので砂を再利用でき、一つの型枠で複数の製品をつくることができる。高岡鋳器の約80%はこの方法）

原型の上に型枠をかぶせ、砂と水を混ぜたものをふるいにかけながら入れていく。

湯（溶かした金属）が流れる際に砂が崩れないよう、型を押し固める。強く押しすぎると原型が壊れる恐れがあるので、力加減が難しい。

型枠ごとひっくり返し、その上に型枠をもう一つのせ、湯道・ガス抜き用のパイプを入れ、離型用の粉末をまぶす。

砂と水を混ぜたものをふるいにかけながら入れて押し固める。固まったら、パイプは抜いておく。

重ねた型枠を開いて湯道を掘ったら、再び型枠を重ね合わせる。これで鋳型のできあがり！

三、溶解・鋳込み・型ばらし

アルミのビレット（塊）を約720℃で溶解する。融点はタバコの火と同じくらいの700℃と、金属の中では低い方。

どんどん溶けていく。

湯道から湯を流し込む。この時、原型の発泡スチロールは熱で溶けてしまう。

鋳型をばらす。湯がまんべんなく流れていた（回っていた）ようで、まずはひと安心。

四、仕上げ（研磨・ムーブメントの取り付け）

まず湯道のバリを機械で切断する。まだ熱いので、手袋をはめての作業だ。

大きめのバリは、先生にハンドグラインダーで削ってもらった。手で触って痛いところが無くなればOK。

ヤスリで細かい凹凸を削ったり、磨きをかけて微調整。

最後にボール盤で穴を空け、ムーブメントを取り付けて完成！

原型の素材や表面加工によって、さまざまな表情が出るんだね。

実習の感想を受講者に聞きました！

彼女に誘われ、初めての工芸体験。先生にアドバイスを受けながら二人で楽しくできた。

今度は、何をつくろうかな…金属のある暮らしを考えてみよう。

鋳物には、皆で協力してつくり上げる面白さがあった。

鋳物とガラスは制作工程が似ていてビックリ。今回学んだ技術を今、勉強中のガラスづくりに取り入れたい。

[平成17年度工芸体験実習開催予定]

高岡市デザイン・工芸センターでは、平成17年度に下記の工芸体験実習を予定しています。諸事情により日程や内容が変更する場合もありますので、ホームページもしくはお電話にてご確認ください。

■親子体験実習1回コース　親子2名1組［子どもは小学3年生以上］

	日程	内容
金工	平成17年　7月31日(日)	アルミ缶を溶かして鋳物のフォトスタンドをつくろう
ガラス	〃　8月21日(日)	ガラスのトンボ玉で小物をつくろう

■市民体験実習1回コース　15歳以上

	日程	内容
染色	平成17年　6月19日(日)	草木染めで絞りのスカーフ（絹）をつくろう
和紙	〃　9月　4日(日)	和紙と自然木でオリジナルの照明をつくろう
金工	〃　10月30日(日)	鋳物のオリジナル時計をつくろう
金工	〃　11月20日(日)	銀粘土でアクセサリーをつくろう
漆工	〃　12月18日(日)	蒔絵の羽子板をつくろう
漆工	平成18年　2月19日(日)	職人形に蒔絵をしよう

■市民工芸実習3/4回コース　15歳以上

	日程	内容
漆工	平成17年　6月　3日(金) 6月10日(金) 6月17日(金) 6月24日(金)	彫刻と漆塗りで丸盆をつくろう
金工	平成18年　2月24日(金) 3月　3日(金) 3月　5日(日)	金属の板をたたいて器や小物をつくろう

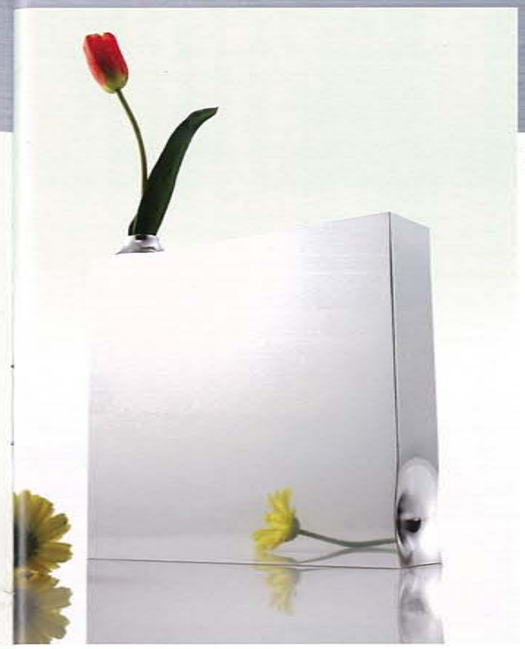
高岡市デザイン・工芸センター　〒939-1119 富山県高岡市オフィスパーク5番地 TEL.0766-62-0520 FAX.0766-62-0521　http://www.suncenter.co.jp/takaoka/

YOUNG MEISTER

高岡を担う未来の匠 ④

世界に通用する高岡ブランドを目指す。

TSM（高田製作所スタンディングメンバー）

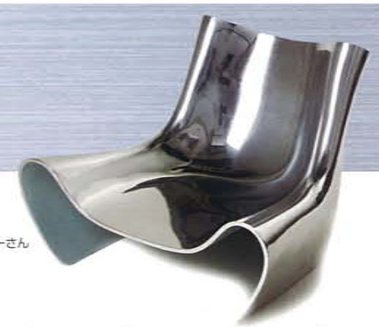


イタリアの大手家具メーカーから注文のあったモダンな花器（イメージ写真）

「じゃあこれでOK、明日ミラノに送ろう」と、満足げに製品をチェックするスタッフ。「まだ取引先とまでは言えませんが外国の地名が出るなんて、一年前には想像もつきませんでした」と語るのは高田製作所の高田晃一常務。

同社は高岡で仏具や建築装飾品のドアハンドルなどを製造しており、平成16年の夏からイタリアの家具メーカーとの交渉が始まった。会社初となる輸出製品の立役者になったのは、高田さんら社内の若手職人ら7名で構成するTSM。発足の経緯をリーダーの畠山建一さんはこう語った。「みんなものづくりが好きで入社したんです。数年前から何人かの職人が高岡クラフトコンペや日本クラフトに応募しているのを見てて、一人じゃ限界もあるし、みんなで力を合わせて作らないかと声をかけたら賛同してくれました」。平成15年10月に高岡市内のギャラリーでそれぞれのクラフト作品を集めて展示会を開催。その後、高田さんと交流のあったミラノ在住のプロダクトデザイナー加賀武見さんから、「自分たちの力を世界で試さないか」と誘いがあったのが同年の12月のこと。そこで加賀さんが既に確保していた「ミラノサローネ」のブースの半分を提供してくれることとなり、とんとん拍子に出展が決まった。「ミラノサローネ」は世界最大の家具見本市で、ファッションでいうならパリコレに相当するビッグイベントと言われる。

開催は平成16年4月。年末年始、土日はもちろん、平日も勤務時間の後に製作に没頭する日々が続く。量産を前提とした製品を発表することとして、加賀さんがディレクターとなりメンバーそれぞれがデザインしたものを幾度となく検討した。その結果およそ20点近い製品を発表することに決まった。ただ、メンバー全員がデザインするのではなく、クラフト志向の職人はサポートメンバーとして製造に携わった。



TSMのリーダー畠山建一さんデザインのアルミの椅子

「ミラノサローネにはすごいメーカーが集まるのは知っていましたが、そこがどんな雰囲気なのか見当もつきません。製作しながらもメンバーはそんな見えないプレッシャーを感じていました」（高田さん）。この時に加賀さんから「圧倒的に美しいものをつくろう。自分が美しくないものは他人もそう思うはず」というアドバイスをもらい、製作に集中したという。

ミラノサローネでは、アルミ鋳造の仕上げや品質のレベルが高いと評価されたという。そして冒頭で紹介したように、会場でミラノの大手家具メーカーからオファーがあったのが写真のモダンな花器だ。早速カタログにも紹介され2カ月後には正式な注文書が届いた。

当然かもしれないがミラノサローネに出展した製品の材料や見本市への渡航費はすべてメンバーの自己負担。今年も続けて出展するが、ひとつの成果を収めたことで会社として一事業として位置づけられ、今年の出展に関する原材料費の一部を会社が負担することとなった。さらに成約したモダンな花器をデザインした社員とは会社初となるロイヤリティー契約を交わすなど、社内に新しい風が吹きだした。リーダーの畠山さんは「ミラノサローネが終わって気がついたんですが、普段の仕事でも仕上げなどで完成度に対するスタッフ同士の伝達能力はかなり上がったと思います」と、仕事に取り組む姿勢の変化を挙げる。

いま、平成17年4月に開催されるミラノサローネに向けた製品づくりがピークを迎えている。今回のテーマは花でプロモーション用のカタログもイタリアで制作する。もちろん次なる輸出製品を睨んでのこと。この春、高岡の若手たちがイタリアでどんな花を咲かせるのか目が離せない。

鹿澤考人さんは鋳型職人

今年からメンバーに加わった増山夏代さんは、リーダー畠山建一さんの下で仏具の仕上げなどに携わっている

ミラノサローネに向けて製作中のメンバー

フォルムの美しさを左右する粗削りなどを手がける小野周平さん（小野さんがイタリアでの成約第一号となったモダンな花器をデザイン）

ミラノサローネに出展したTSMのブース

テーマを「2050年に向けてのモノづくり」として、その時代にどんな素材が残っているのか、強度や重量、リサイクル性などの側面を検討してアルミを素材にした製品を発表。

説明しているのが加賀武見さん（写真右）

今年のミラノサローネに出展するTSMのメンバー。職人は常にカッコよくありたいというメンバーの意向で、スタジオ撮影したもの。ミラノサローネのプロフィール用としても使用する予定。左から小野周平、高田晃一、畠山建一、増山夏代、鹿澤考人（敬称略）、他の2名は製作のサポートメンバーとして参加。

技を伝える

伝統的工芸品技術・技法継承者育成事業

平成16年度の育成者は漆器の彫刻塗で知られる内島昭夫さんで継承者は高森淳一郎さん。高森さんは仏壇の製造・販売会社の後継者として、新しい技術を反映した仏壇づくりを目指しての修業である。なお高森さんは当センターが実施している「技術者養成スクール」を昨年度修了している。

内島さんが指導するのは、師匠も初めてという仏壇の内陣に取り付ける柱への彩色彫刻塗。また、装飾金具への彩色塗もあわせて進められた。「もう素人ではないし、熱心で教え甲斐がある」という師匠に対し「部分的にでも仏壇に取り入れて、特色のあるものを作りたい」と弟子の心強い言葉が返ってきた。

伝統工芸産業後継者育成技術伝承講義

本年度の講師は、輪島で朴木（ほうき）地（じ）職人として活躍される桐本泰一（きりもとたいいち）さん。もともとプロダクトデザイナーだった桐本さんは、地元の職人らと共に創作活動や商品企画・デザインを進める漆器のプロデューサーとしても注目されている。今回は氏の活動をもとにした「木地屋からの漆の提案と発信」というテーマで3月15日に講義をしていただき、産地固有の伝統技術を今の暮らしにどう活かしたらよいか、その方法について実例を交えて解説いただいた。

桐本さんが手がけた器

高岡市デザイン・工芸センター利用時間変更のお知らせ

これまで土曜日の夜間（午後5時～午後8時）には工房を開放し市民の皆様に利用いただいていましたが、平成17年4月1日より平日および日曜日と同じ午後5時に閉館することになりました。

ただし、利用を希望される方については、配慮いたしますので事前にご連絡ください。

問合先／高岡市デザイン・工芸センター
TEL.0766-62-0520

MATERIAL & TECHNIQUE REPORT 7

高岡発「素材と技術」レポート——⑦

素材&技術

モノづくりの町・高岡を下から支えているのが新しい素材や技術の開発。起業家精神に満ちあふれた技術者たちが日夜研究にいそしみ新素材・新技術を生むべく努力している。ここではその基礎となる新しい素材や技術の開発動向をレポートする。

合せガラスに漆を用いて和のモダンな素材を開発

㈱グラスキューブ＋㈱三佳

「漆を塗った薄い素材をはさんで、合せガラスをつくったらおもしろいのではないか」。平成15年夏、ひとりのデザイナーがつぶやいた。

この新しい素材にチャレンジし、「漆ガラス」の開発にこぎつけたのが㈱グラスキューブ（ガラス加工メーカー三芝硝材の販売会社）と㈱三佳（漆調美術内装材等の製造販売）である。ともに高岡市内に本社を置く企業で、漆とガラスの組み合せは初めてであるため、製造の過程でどのような問題点が発生するのか、当初は予想もつかない状況であった。

ピンホールの発生を解決

早速、試作に取りかかった。漆を塗る素材として最終的に選ばれたのは、和紙とペットフイルム。安定的な供給と合せガラスに加工する際に高温・高圧をかけるため、変質しない素材が選ばれた。

通常、漆器をつくる場合、漆を塗って研ぐ作業を何度も繰り返す。多い場合は30回近く塗り、磨いた後には、例えば漆器に映った天井の蛍光灯が波打たないほど、表面の平滑さが求められてきた。

しかしガラスに合せる場合は、そこまでの技術が必要でないことがわかった。刷毛の溝痕が残っていても、合せる際に用いるフイルムによって表面の凹凸が吸収されているのではないかと推測されているが、平滑に漆が塗られたように見える。

難点であったのは、合せる際にピンホールができること。漆の中の溶剤が熱によって反応し、破裂した痕を無数に残したのであった。

漆を塗った和紙を用いた合せガラスの例。漆で染めたようになり、間接照明をすると和紙の模様が独特の風合いをかもし出す。

グラスキューブの野村敏夫営業本部長（上）と三佳の山村隆一社長。デザイナーのひとことからガラスと漆のコラボレーションが始まった。

上：乳白のフイルムをはさんだ合せガラスを階段に用い、下からライティング。ノンスリップガラス（特許取得）を使っているため滑らない（JR川崎駅前）。
左：金箔の合せガラスをエレベーターホールに使用した例。合せガラスでは、3㎜程度の厚みのあるものまで合せることができ、建材・内装材として注目されている。

特許申請の準備中であるため詳しくは記せないが、漆を乾かす際の温度・湿度等と溶剤が関連するためにこのピンホールはでき、三芝硝材では合せる前にある加工をしてこのトラブルの解決に成功した。

欧米や中国が注目

ペットフイルムの場合は、普通の漆器のような螺鈿や重ね塗りもできる。和紙の場合は、塗ったというより漆で染めたように見え、インテリアに用いバックライトを当てると、従来にない質感をかもし出してくる。

昨年の秋から見本をそろえ、建材、インテリア素材等の展示会でPRし始めたが、"和のモダン"の建材として特に欧米や中国から注目を集めた。

ちなみに、漆ガラス1枚の大きさは最大で1.2m×10m。曲げることも可能であるため、建材・インテリア素材として多様に使えるのではないかと期待されている。

漆を塗ったペットフイルムを合せガラスにしたもの。

漆塗りの工程。右：黒漆下地に模様つけ。左：螺鈿の張り込み。

ユニバーサルデザインのスプーン開発

㈱能作

使う人の手の状況に合せて持ち手とさじの形を変えることができる

従来の障害者用のスプーンは、持ち手の柄の部分を曲げるだけのものや、持ち手がゴム製のものであった。しかし柄の部分を折り曲げるだけでは自由度が少なく、またゴム製では煮沸消毒ができないという難点があった。

能作がこのほど開発したスプーン（特許申請中）は、スズ100%で軽く力を加えるだけで様々な形に変えることができるスグレモノ。スズは銅と比較して酸化や変色が起こりにくく、また金属アレルギーも起こしにくいという特徴を持っているため、一部にはスプーン等に利用できないかという声があった。

しかし、スズは加工が難しい。そのため従来は銅や鉛との合金で使われてきたが、能作克治社長自らが音頭をとって生型鋳造に挑戦。スズ100%でもきれいに成形でき、持ち手とさじの形を変えることができるスプーンの開発となったのである。

持ち手、さじ部分の両方の形が変えられるスズ100%のスプーン。

Design Craft Center 事業案内

高岡の素材や技術を紹介したHP「たかおか素材・技術百科」が開設

高岡は、銅器・漆器などの伝統工芸品をはじめとする金属加工や漆塗りの技術が400年にわたって蓄積されてきた。今日では、各種製造・加工業にその技法を生かすとともに、インテリアや生活用品の生産の場でも活用されている。その素材ごとの技術の概要をまとめたホームページを平成17年3月末に開設。金属鋳物や漆塗りで製品をつくりたいと検討している企業や施工関係者に、またデザイナーやプロユーザーの方に、加工工程について写真や動画も交えて紹介する。

製造工程などを細かく紹介。MOVIEマークをクリックすると、動画での解説も見ることができる。

●URL http://tmte.media-pro.co.jp/index.html

久しぶりのコンペ審査であった。高岡のなつかしい方々との再会やこころ温まるもてなしなど、楽しい時間を過ごすことができた。このコンペも18回を迎えたようで、時間の経過による安心感がただよっていた。伝統と現代を日常という切り口で、模索する若い創造者たちの熱気は十分伝わってきた。その力や情熱を絶やさないためにも、このコンペの位置づけはたいへん重要であることを再認識した。

今回の審査は経験豊かな関係者の進行で、スムースに終わることができた。そして、審査後に自分が買い手に廻る楽しい時間が用意されている。いつも不思議に感じるのだが、それまで審査でしていた出品作品に対する評価と自分が個人で求める作品と、微妙に食い違っている事が多いようだ。つまり、自分の個人的な生活感や価値観が客観的評価を対象とする審査とは、必ずしも一致しないのである。使う状況や収納場所など、作品以外の個人的な条件との整合性も加わってくるし、価格も大きな要因となるようだ。急に選択肢の巾が狭くなり、審査より熱が入ることもある。おそらくこのページの企画もそのへんにあるのだろう。

しかし、それらの条件を超えた作品との出合いもある。主観や客観など理屈を超えた作品で、どうしても自分の元に置きたい作品である。

今回わたしが選んだ作品は奨励賞をとった鷲塚貴紀さんの「River」シリーズで、その両方を満たしてくれていた。都心にしては比較的に緑の多い私の住空間には、ガラスなどの硬質な透明感のある素材が、よりその存在感を増すようで、この作品のもつ有機的なフォルムに溶け合う光や色を楽しめると思ったのである。

CHOICE.

2004 TAKAOKA CRAFTS EXHIBITION

審査員が買ったクラフト

工芸都市高岡2004クラフトコンペティション審査委員長「伊藤隆道」

2004

伊藤隆道

Ito Takamichi 「造形家」

1939年札幌市生まれ。東京芸術大学卒業、同年から資生堂ウインドウデザインを手掛ける。毎日産業デザイン賞など多数受賞。大阪万博、沖縄海洋博、つくば科学博などに参加。照明デザインや環境デザインなど幅広い活動を展開し、野外彫刻展でも「動く彫刻」で多数の賞を受賞。国内外に多くの作品が設置されている。現在、東京芸術大学教授、環境芸術学会会長。

ムーヴィン通販倶楽部

2004クラフト展作品誌上通販

「匹で数える器」

青木有理子（富山県）

●花器 ●金属
●W17.5×H6.5×D11㎝（花器のみ）

価格 10,500円（苔入り）

はりねずみの優しい表情にご注目。苔の楚々とした和の風情も相まって、眺めれば疲れも癒される。モダンに楽しみたい時は、花をアレンジしてみて。

心地よい器、さわやかな緑と過ごすとっておき時間

部屋の中にグリーンや花があるだけで、気持ちがほっと和みます。そんな癒し空間のフレッシュなアクセントとして活躍してくれそうな器を、入賞・入選作品の中からピックアップしました。しゃれたアレンジで安らぎの時間をお楽しみください。

掲載の作品は、インターネットからご注文いただけます。

「SANBONASHI」

島田映（富山県）

●皿・トレー ●ガラス ●カラー…赤・白
●大…φ20.8×H2.2㎝、中…φ16.8×H2.2㎝、小…φ12.8×H2.2㎝

価格 大6,300円
中4,200円
小2,630円

不透明ながら、明るく澄んでいる色ガラスの器。マットな質感が味わい深く、見ているだけで元気になれそう。確かな技から生み出された三本足の形も、料理やデザートの盛りつけが楽しめる。

作品は（大）を使用しています。

テーマ部門賞

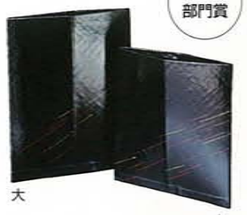
「紙パックと漆の掛花入」

斉藤慎二（富山県）

●掛花入 ●漆・紙パック・麻布
●大…W14×H18.5×D2.7㎝、小…W14×H15×D2.7㎝

価格 大6,300円
小5,780円

紙パックで花入れをつくった斬新さにびっくり！今までになかった薄さと軽やかさを実現している。麻布の重ね張りにより、漆の美しさや耐久性、メンテナンスのよさも文句なしの二重丸だ。



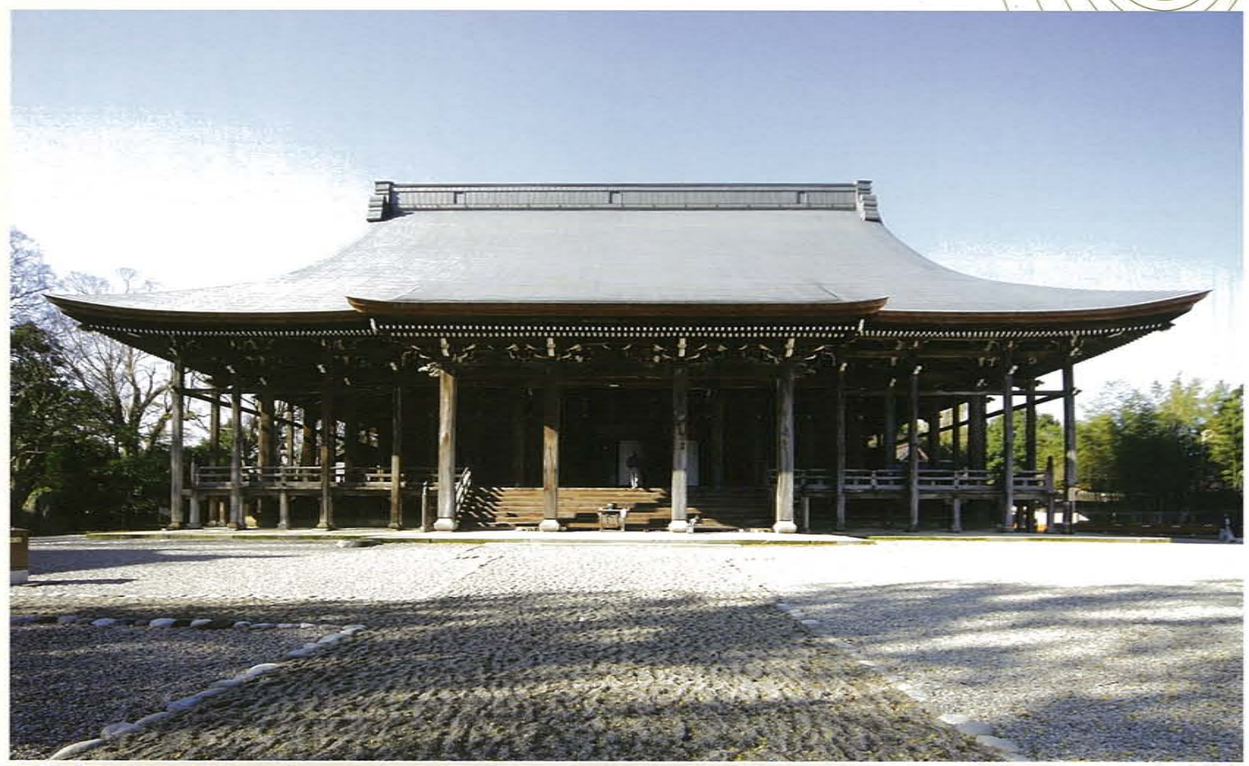
大　小

※下記URLにリンクされている申し込みフォームでご注文ください。
※通販有効期限＝平成17年9月末

http://www.ccis-toyama.or.jp/takaoka/craft/

【注意事項】●ご注文が１万円以上の場合、送料無料。●商品到着後９日以上経過したものや、お客様のもとで破損・汚損・傷が生じたものは、返品をお受けできません。●電話・ファックスでのご注文は受け付けていません。●商品は手作りのため、形状・色・寸法などに多少の差が出る場合があります。●商品によっては、ご注文から１～２ヶ月ほどお待ちいただくことがあります。また、数に限りがありますので、万一品切れの際はご容赦ください。●お支払い方法・送料等の詳細は、上記URLに明記されています。ご注文の際には、必ずご確認ください。

ロケ協力：COUP（クー）



国指定重要文化財 雲龍山 勝興寺（うんりゅうざん・しょうこうじ）／勝興寺は本願寺八世蓮如上人が越中布教の拠点として、文明3（1471）年に現在の南砺市土山に土山御坊を建てたのがその始まり。その後、戦国時代の混乱に巻き込まれ幾度となく移転を重ね、現在地へ天正12（1584）年に移転。境内には越中国庁があったとされる。平成17年5月には落慶法要が営まれる予定。

高岡 伏木

古刹「勝興寺」の輝きが甦り 新しい賑わいづくりが始まる。

高岡市は「万葉のふるさと」、あるいは伏木富山港を有する「国際港湾都市」としても知られている。これらの中心となるのが伏木だ。港町の風情と越中万葉に関する史跡や文化財も多く残ることから訪れる人も多い。これまでもさまざまな活性化に取り組んできたが、いま勝興寺の大改修を機会に、新たな賑わいづくりへ向けて動き出した。

およそ200年振りに輝きを取り戻した勝興寺への期待

高岡市の北部、小矢部川の河口に広がり富山湾を望む町、伏木。ここにはかつて越中国府が置かれ、万葉歌人の大伴家持が奈良時代に国守として赴任した。5年間（746～751年）の在任中に越中の自然と風土を詠んだ多くの歌が万葉集に収載されている。かつての国庁跡にはいま、真宗寺院では国内有数の規模を誇る勝興寺が佇む。本堂の高さは約24メートルで6階建てのビルに相当するスケールだ。

本堂は寛政7（1795）年の建立で、近世寺院建築の歴史を物語る建造物として国指定重要文化財に指定されている。そして文化庁の補助を受け、平成10年末から進められてきた第1期修復事業となる本堂の大改修が昨年11月に完了。創建当時の威容が甦った。ある程度の人出を予想していたが完成後の10日間でおよそ3万人もの人々が押し寄せた。まさかこれほどの人が来ようとは、と、住民は口をそろえて驚いたという。その後、足場の悪い冬でも例年とは比較にならない数の参拝客が訪れた。

寺内町／勝興寺の門前につくられた町。住宅前の通りは旧参道で、現在の参道は明治31年に新設された。今年の10月には金沢市、岐阜市、大野市、上越市、飯山市の6都市で企画する寺院を生かしたまちづくりを考える「寺町サミット」が勝興寺を主会場に開かれる。

国定公園「雨晴（あまはらし）海岸」／万葉集に「渋谿」と詠まれた白砂青松の景勝地。富山湾越しに望む3,000メートル級の立山連峰は絶景。「日本の渚百選」に選ばれている。

高岡市は大伴家持ゆかりの地として早くから「万葉のふるさと」として全国へアピールしている。その情報発信基地となるのが「高岡市万葉歴史館」だ。映像や音で構成された常設展や万葉ロマンを展開する企画展の開催、また豊富な文献資料を収蔵しており、万葉研究のメッカとして全国から万葉ファンや観光客が訪れる。地元の観光ボランティア「比奈の会」は昭和62年の発足以来、万葉関連の景勝地や史跡への案内が中心だったという。同会代表の幸塚サヨ子さんは「改修後の勝興寺の案内には新人も加わってフル活動です。これを機に伏木がさらに魅力ある、行ってみたい町になってほしい」と、伏木の観光推進役として期待する。同会では案内場所を事前に掃除するなどおもてなしを大切にしているが、観光名所の周辺には休憩や食事を楽しむ施設がほとんどなく、おもてなしができなくて残念という。また、各名所との繋がりを魅力あるものにするかをいろんな会で検討してほしいと願う。

高岡市万葉歴史館／映像と音による展示が人気。屋外には万葉集ゆかりの草花や樹木を配し季節ごとに楽しめる四季の庭園がある。

改修を契機に賑わいづくりへの新たな動き

一方、改修に合わせて観光振興の拠点づくりに若手も動いた。参道にオープンしたフリースペース「ふしぎ屋」を運営するふしぎ屋ネットワークで、伏木商工業青年部会の有志らが立ち上げた。同部会ではかねてより観光振興策を検討しており、OBらの協力もあって勝興寺の完成式にお披露目となった。カフェやギャラリー、同青年部会で考案したグッズの販売、地元商店と連携したお土産販売など多機能なスペースになっている。同部会の竹本毅会長は「当初は2日間だけ営業する予定でしたが、あまりの人出だったので4日間に延長しました。当面は不定期ですが週末などに開店する予定です。希望者には展覧会やコンサートホールとしても貸し出したいと考えています。ここに来れば週末に何か面白いことをやっているというイメージを定着させて、伏木の活性化に結びつけたい」と語る。また4月の「伏木観光まつり」では試験的に人力車を走らせ、勝興寺の門前「寺内町」を運行した。

人力車で寺内町を案内

ふしぎ屋／勝興寺に伝わる七不思議伝説と伏木の語呂合わせから「不思議な魅力」を発信するという意味で名付けられた。

勝興寺や旧伏木測候所、伏木北前船資料館などの観光スポットを巡りながら、人波に回遊性をつくりだすことが狙いという。比奈の会から観光ガイドの手ほどきを受け、名所を案内したところ評判も上々で、景観にもマッチすることから今春をめどに人力車を購入し、ふしぎ屋を発着所と展示場にする予定だ。

勝興寺の参道には早くからお土産店「やや家」が暖簾を出している。出店したのは人通りもまばらだった平成9年。その経緯を代表の江守武治さんにうかがった。「昔からお土産屋はいつかやろうと思っていたんです。京都には有名なお寺の近くにお土産屋は必ずがありますよね。でも当時、瑞龍寺はおろか県内の有名なお寺の門前にお土産店はほとんどなかったんです。勝興寺の改修計画もあったので、改修がすべて終わる20年後にはきっと人が集まるはず。老後の仕事としても続けたいから、早めに決心したんです」と振り返る。出店にあたっては金屋町でお土産店を営む「利三郎」（本誌12号25頁に紹介）に足繁く通いアドバイスをいただいたという。

やや家／勝興寺関連のオリジナル土産や作家作品も販売。

旧参道（奥に見えるのは勝興寺）

「覚悟はしていたけど開店以来赤字ですよ。でもそろそろ赤字も解消できそうな雰囲気」と人が行き交う参道を眺める。

店を営む一方、江守さんは4年前から仲間と越中万葉七福神巡りという観光ツアーを進めている。地元を代表する祭り「伏木曳山祭けんか山」の七福神信仰にちなみ、伏木周辺の高岡、新湊、氷見の寺社と連携して、それぞれが所蔵する七福神を詣でる旅だ。毎回趣向を凝らし、既に12回を数える。最近では勝興寺はもちろんNHK大河ドラマ「義経」にあやかり義経伝説のある「如意の渡」などもコースに組み込んだ。ツアーは伏木に賑わいやリピーターを促進する意味がある。「新しいものを無理して作らなくても、古いものを掘り起こしていくことが大切」と江守さんは伏木らしい賑わいづくりを強調する。

如意の渡／左岸の伏木と右岸の六渡寺をフェリーで結ぶ。室町時代の軍記物語「義経記」に、源義経が平泉の藤原秀衡を頼って奥州に落ちのびる際に、この地を経たとの伝承がある。この他にも、高岡には義経岩の雨晴、気多神社の弁慶の足跡等、義経・弁慶にまつわる伝説が多い。

旧伏木測候所（越中国守館跡）／地元の廻船問屋の藤井能三が私財を投じて明治16（1883）年、伏木港に出入りする船の海難防止のために設置したのが始まり。この他、藤井能三は伏木港の近代化や、県内初の「中越鉄道」の建設、また県内初の公立学校（現伏木小学校）の創設など、郷土発展のために私財を投げ出して全精力を尽くした。地元では伏木が誇る人物として畏敬の念を抱いている。

藤井能三が建設した灯明台（復元）／藤井能三が明治10（1877）年に私財を投じて建設。船着場だった伏木浦が近代湾港への発展する契機となった日本海側初の西洋式灯台。平成11年に伏木港開港100周年を記念して復元された。

点から線、線から面へと広がる動線づくり

伏木駅前から高岡市役所伏木支所へ伸びる約800mの道路は、段差を無くしバリアフリー化された歩道が続く。通りにはカモメや曳山の車輪などをデザインした街路灯が続く。富山県の文化性導入事業として平成14年に整備された。これらは伏木地区開発推進協議会らの要望で実現した。事務局長の東海達也さんは「この事業もそうですが、協議会では伏木の活性化に向けて駅前のスーパー跡地の駐車場化をはじめ旧測候所の利用など、早くから高岡市に要望しており、ここにきてようやく実現にこぎつけました。旧測候所の利用方法については現在、検討委員会が論議に入ったところです（2月現在）。道路や施設の整備を進めながら観光ポイントをこれまでの点から線へ、そして面へと見所が広がるようになれば」と期待する。同協議会は各団体の代表者らで構成され平成2年に発足。以来、港湾関係や歴史文化、道路整備、人材育成の視点から伏木の活性化に向けて取り組んでいる。

高岡市伏木北前船資料館
北前船の通商で栄えた伏木と周辺の村々の歴史や当時の水運の様子などを紹介している。高岡市内で唯一望楼が残されている回船問屋の町家「旧秋元家住宅」。

駅から伏木の賑わいを考える

「これからの伏木には町の中心が必要だと思います。それはJR駅ではないでしょうか」と語るのは同協議会で副会長を務め、また伏木文化会で会長を務める大黒幸雄さん。続けて文化会の考えとしながら「たとえば参道にお店をつくるのも必要ですが、賑わいをどうやってつくるかを考えていくことが大切だと思います。駅から勝興寺までの距離も約350mと近いのですから、参道を歩いていただくこと、途中の旧測候所もそれに合わせて活用を考えるべきでしょう。駅に情報の受発信機能をもたせる考え方は全国的に展開されており、小規模な駅ほどその意味合いが深いと言われています。そこを軸にして勝興寺や棚田家、北前船資料館、万葉歴史館、気多神社など多くの史跡を有機的に結ぶ方法を検討しなくてはなりません。駅前駐車場の確保もできましたし、近くには地元有志による商業施設の計画もあります。駅舎の機能を見直しながら伏木の賑わいに向けたプランの構築が必要ではないでしょうか。文化会では主に活性化プランを理論付けていく立場にあります。でも理屈ばかりうるさいことを言うから、煙たがられているんですよ」と苦笑する。

文化会の発足は昭和17年。県内に文化と付く会の多くが戦後生まれであることからも、伏木人の文化や芸術、歴史に対する熱い思いがうかがえる。近年では先の万葉歴史館設立の提唱や大伴神社の創建に奔走した。とくに大伴家持を奉る神社の建立によって、内外に向けて伏木が万葉の故地であることを宣言する拠所にもなったという。また、忘れつつある古い地名を後世に残そうという考えから旧町名入りの石碑を設置するなど、地域の歴史や文化の啓蒙活動など多岐にわたる。

大伴神社（気多神社境内）

これらの期待と課題

勝興寺は残る奥書院や400年前に建てられた大広間など、11棟を保存修復する第2期修復事業が始まる見通しとなり平成29年の完成を目指す。その間に新たな歴史的資料が発見されれば、瑞龍寺に次いで国宝指定につながる可能性も高いと住民の期待は膨らむ。

勝興寺

勝興寺をはじめとする伏木のオンリーワンの名所旧跡や景勝地、そしてイベントなどは、周辺の町に比べれば羨むほど多い。半面それらを運営したり、あるいは活性化に向けて発足した数十の部会があるといわれる。だが、各々の会を横断して連携しながら一つの問題に取り組む機会は少ないという。観光名所は多く点在するが「ばらばらな感じがする」という声の裏側には、そんな事情も影響しているのかもしれない。既にハード面はそろいつつある。理想論だろうが今後は各々の会が横断的に連携して、住民を巻き込みながら足並みをそろえていくことが必要だと思う。これからの動きが12年後に全容を現す勝興寺の魅力にもつながるのだから。

AQUARIUM #003

株式会社竹中製作所

AQUARIUM #003

2004年度グッドデザイン賞受賞

使いやすくてシンプルでオシャレで… そんな靴べらを探していた方に注目のデザイン。プロダクトデザイナーの澄川伸一さんによるこの靴べらは、持ちやすくシェイプされたフォルムに自立する機能を持たせ、まるでオブジェのような美しさ。しかも、アルミ製だから、丈夫で長持ち。げた箱の中へしまい込まずに、ぜひ飾って楽しんで！

AQUARIUM #003／高耐蝕性アルミニウム／φ3.2×H33.0cm 価格7,350円

問（株）竹中製作所 tel 0766・28・6264

made in takaoka

高岡で生まれた逸品 ❸

t[j]r

Fontana series［フォンタナシリーズ］
Citta series［チッタシリーズ］

モダン、カジュアルなどの、どの枠にもおさまらない多様性を持った、t[j]rの2005-06新商品。凛とした雰囲気、やわらかく温かみのある感じを、インテリアや食器などその場に応じて使い分けることができる。漆や金属の仕上げもキレイできちんとした漆器なのに、よそよそしさがないところもいい。今の暮らしの質をグレードアップしたい方におすすめだ。

トレー Fontana series

〈シリーズ共通素材〉栃、漆、真鍮、クロームメッキ

[Fontana series]
- ●トレー小・黒／呂色仕上げ／φ10.0×H2.5cm 価格14,490円
- ●トレー中・黒／ぬりたて仕上げ／φ15.5×H4.0cm 価格16,590円
- ●トレー大・朱／呂色仕上げ／φ25.5×H5.2cm 価格31,290円

[Citta series]
- ●タオルボックス・黒／ぬりたて仕上げ／W15.5×H9.5×D13.3cm 価格43,050円
- ●ダストボックスM・朱／呂色仕上げ／W12.5×H22.0×D12.5cm 価格60,900円
- ●ティッシュカバー・黒／ぬりたて仕上げ／W26.0×H9.5×D13.3cm 価格63,000円

問 t[j]r事務局（高岡漆器（株）内） tel 0766・21・0262

開き窓

三協アルミニウム工業株式会社

高性能省エネサッシシステム ARM-S［アームス］

2004年度グッドデザイン賞受賞

高性能ではあるが美しさは今ひとつなサッシが多いビル用建材市場の中で、この「アームス」は貴重な存在。複層ガラス対応の省エネサッシでありながら見付がスリムで、しかもハンドルやヒンジなどのパーツデザインまでも統一し、すっきりとシャープな印象だ。トータルな外装デザインにも対応できるよう、窓のバリエーションも豊富に揃っている。

自動ドア／
アルミニウム・シルバーマット仕上げ（標準）、複層ガラス
参考価格 W240.0×H240.0cm 180,000円
（ガラス及びエンジン装置代別途）

自動ドア

問 三協アルミニウム工業（株） tel 03・5348・0367